

## 幕末期における海外情報の受容過程

## —蘭書の輸入と受容形態をめぐって—

宮地 哉 恵 子

- I. はじめに
- II. 「プリンセン」以降の蘭書
1. 渡辺華山と『外国事情書』
  2. 箕作省吾と『坤輿図識』
  3. 『坤輿図識補』小考
  4. 『八紘通誌』小考
- III. むすび

## I. は じ め に

江戸時代を通じて海外情報の受容は、「鎖国」という制限のなかで行なわれた。こうした情報の大部分は、世界に向けて唯一開かれた窓であった長崎からのそれが主流を始めていた事はいうまでもない。「鎖国」によって外国体験の道を閉ざされた日本人は、不完全な情報の中からも外国に対する知識の吸収に努めた。特に寛政年間にロシアの南下政策が開始されロシア船が来航するようになると、日本においてもこれに対応すべく海防意識が高揚し、林子平の『海国兵談』のごとき書が著されるに至った。これら一連の対外危機感の中で、海外知識を摂取することが急務となり蘭学が次第にブームとなっていったことは当然の成り行きであろう。

このような状況のなかで海外情報を入手する手段は、主として三つに分類される。第一は阿蘭陀風説書・唐風説書を中心とする情報であり、第二はオランダ・中国から輸入される書籍による情報であり、第三はこれ以外の様々な情報であった<sup>(1)</sup>。殊に書籍による海外情報は、情報のスピードや具体性といった点では風説書に一步譲るが、包括的な知識の提供という点では他の情報に勝っている。特に蘭書による情報は、もちろん舶来する数の制限や使用する人間のレベルにも限界があったにせよ、西洋についての有力な情報源として原語で読まれ、あるいは翻訳本を通して流布していったといっても過言ではない。多くの人々が読むことのできた漢籍や体験記としてまとめられた漂流記よりも、蘭書は、情報の正確さという点で広く受け入れられていった。

これらの蘭書による海外知識の獲得は、はじめは地理書を中心に行われた。特に地理書の中に記された断片的な国際関係や各国事情についての知識が着実に蓄積され拡大していった。

これら地理書の中で、代表的なものがヨハン・ヒュブネル (Johann Hübner, 1668-1731) の著書 *Krutze Fragen aus der neuen und alten Geographie bis auf gegenwärtige Zeit* (1711年) の蘭訳本で、蘭学者間で「ゼオガラヒー」と呼ばれていた書籍と<sup>(2)</sup>、また「ゼオガラヒー」と共に読まれたプリンセン (Pieter Johannes Prinsen, 1777-1854) の著書 *Geographische oefeningen* である。これらの書籍は、当時の蘭学者がしばしば利用したため、「ゼオガラヒー」や「プリンセン」といった名称で通用了。

しかし1800年代に始まったイギリス資本主義のアジア進出は、これら地理書による知識の限界をもたらし、地理学書による情報受容は変容期を迎えることになる。この頃日本で起きたモリソン号事件及びそれに伴う「蛮社の獄」は、蘭学禁止にまで発展し、かわって『海国図志』をはじめとする漢籍が新たな情報源として登場してくることになる。『海国図志』は、中国がアヘン戦争に敗北した直後に完成した魏源の著作である。この書が舶載してきた頃には、日本では既にアヘン戦争敗北の情報は伝わっており<sup>(3)</sup>、対外危機感は十分高揚していた。このため、『海国図志』は必要に応じて国別に翻刻され一般に流布していく<sup>(4)</sup>。しかし『海国図志』舶載の直後の嘉永6 (1853) 年、日本ではペリー来航を迎え、幕末期の日本における対外危機を乗り切る手段として蘭学や洋学が再評価されるようになった。

ペリー来航と開国は、今迄の「鎖国」体制にあった日本の海外情報の枠を一挙に拡大すると共に、欧米諸国における学問が、もはやオランダ語を主流とした従来の蘭学では充分ではなく、英語をはじめとして欧米各国の学問の必要性を認識させる事となった。幕府が洋学所を設けて (安政2年)、諸外国情報への対処のため洋書の翻訳を盛んに行なうようになったのは、蘭学から洋学への転機といえるであろう<sup>(5)</sup>。この翻訳書類は、やがて刊本として広く一般に普及し、対外危機感をいざく人々に読まれ、西洋事情研究への源泉となっていく。

こうして洋学は、「蛮社の獄」以前の地理学的情報を中核とする蘭学から脱却して砲学・兵学など多くの分野と結びつき、幕末・維新期における変革の一端を担っていくことになる。もちろん自然科学分野については蘭学時代からの影響が大きいですが、洋学時代となると社会科学分野、中でも政治制度や各国政治事情の紹介にこの時代の大きな特長がみられる。この種の政治的情報と洋学の結びつきは複雑多岐にわたり、問題が多く残されている<sup>(6)</sup>。

ところでこの洋学の成立の基礎には、蘭学の伝統や漢籍による西洋事情の収集があったことは当然である。先に述べたように蘭学から洋学への転換は容易になされた訳ではなかった。以下、「蛮社の獄」直前からペリー来航直後に至る時期に刊行された、代表的な地理書を例にとって検討していきたい。

この時期は、「ゼオガラヒー」や「プリンセン」といった1冊の蘭書の抄訳という形態よりも、複数の蘭書からの抄訳を編集するという「情報集成本」の形態が採用されるようになる。ここでは『外国事情書』『坤輿図識』『坤輿図識補』『八紘通誌』を例にとり、そこに引用されている蘭書を検討してみよう。即ち、これらの「情報集成本」

に引用され、典拠となった蘭書類は、作者名や書名の一部でしか示されていない。その原本を確定することにより、この時期の蘭書の輸入と受容を考えていきたい。

なお、本稿作成にあたり、使用した目録類を次のものに限定せざるをえなかった。すなわち、旧幕引継資料類<sup>(7)</sup>、阿蘭陀船の書籍銘書類<sup>(8)</sup>、およびオランダ側の資料である<sup>(9)</sup>。この他にも蘭書に関する文献はあるが、遺憾ながら網羅できなかった。

## II. 「プリンセン」以降の蘭書

ヨハン・ヒュブネルの「ゼオガラヒー」と共に代表的な地理書であったプリンセンの著書 *Geographische oefeningen* は、第二版(1817年)本から第五版(1845年)本までが輸入されその翻訳が行われている。たとえば小関三英の『新撰地誌』は第二版よりの抄訳であり、渡辺華山の『新釈輿地図説』及び杉田玄端の『地学正宗』も第二版からの抄訳といわれている<sup>(10)</sup>。第三版は『新撰地誌』の改訂に用いられたといわれ、第四版及び第五版は幕府に輸入され、箕作省吾の『坤輿図識』などに使用されている<sup>(11)</sup>。従って、「プリンセン」は最初に輸入された時点から長期に亘って使用された。

しかし、小関三英が行ったような「プリンセン」の全体にわたるような抄訳は第三版以降はみられない。これは単独情報から複数情報を必要とするようになった社会の変化が大きく影響しているように思われる。第三版(1824年)本が輸入される頃は、異国船が頻繁に渡来するようになり、対外危機感の高揚の中でより多方面からの情報を得ることが急務となっていたからである。このような社会状況に 대응べく執筆されたのが、渡辺華山の『外国事情書』である。

渡辺華山(1793-1841)は三河国田原藩士で、彼は田原藩の海防担当の海岸掛という役職にあった。彼は当時の対外危機の高揚に伴い蘭学に興味を抱くようになる。華山自身はオランダ語の素養を持たなかったが、蘭学者との交流の中で海外情報を収集し、研究していった<sup>(12)</sup>。こうして完成したのが『外国事情書』である。『外国事情書』は華山の研究成果の集大成であり、海防を意図して書かれている。だが華山の時代の情報は、蘭書に書かれた情報を紹介するにとどまり、学術的水準まで高められたものとはいい難たい。しかし本書は、「プリンセン」以降の著作の中では、より多くの情報を収集し編集した「情報集成本」の先駆ともいべきものである。

華山はこの『外国事情書』を著したのち、「蛮社の獄」で高野長英と共に処罰され、蘭学は一時後退を余儀なくされることとなった。海防意識が高まっているとはいえ、相対的に安定した時代にあつては、政治批判ともなりうる蘭学は歓迎されなかったわけである。しかしアヘン戦争の敗北は幕府に危機感を与え、西洋諸国の情報に関心を向けさせ、西洋諸国事情探求のため蘭学再興に力を貸すことになった。幕府の政策変化や兵学としての蘭学摂取の動きの中で<sup>(13)</sup>、意図的に編集された形態としての「情報集成本」が登場してくることになる。箕作省吾の『坤輿図識』及び『坤輿図識補』はその代表であろう。

箕作省吾はオランダ国王による開国勧告が行われた翌年の弘化2(1845)年に『坤輿

図識」を著した。地理書の形式をとりながらも様々な蘭書を引用して編集を行っている。そしてその補遺編ともいふべき『坤輿図識補』においては、さらにその強化をはかると共に異国船来航に対する備えを行っている。事実、『坤輿図識補』完成の弘化3年にはアメリカ使節のビートルが浦賀に来航した。こういった異国船の相次ぐ来航の中で幕府はようやく本格的に海防問題に取り組むようになり、やがて迎えるペリ来航までの間に箕作阮甫によって『八紘通誌』が著されることになる。これらはいわゆる単なる地理書ではなく、複数の情報による正確な情報提供と未知の分野の探求を目的とする総合的な「情報集成本」として編纂刊行されたのである。

以下「プリンセン」以降の蘭書を、「情報集成本」のはじめである『外国事情書』からその完成ともいえる『八紘通誌』まで、その引用蘭書を検討していくことにする。

### 1. 渡辺崋山と『外国事情書』

『外国事情書』は、天保10(1839)年に渡辺崋山が江川英竜の求めに応じて記した西洋事情書である。内容は、文明の発生から現在に至る西洋諸国の概括的な歴史をたどり、さらに当時日本人が危機感を持っていたイギリス及びロシアについての国情を紹介している。

本書の特徴は、主要な事項について典拠が明示されていることである。これによれば、「プリンセン」がその多くを占め、その他にも次のような漢籍や蘭書や日本人著作や訳本類が引用されている。

すなわち引用文献中の漢籍や日本人著作の主なものは、イエズス会士のジュリオ・アレニ(Giulio Aleni, 1582-1649, 漢名は艾儒略)の『職方外紀』、賀張齡編の『皇朝経世文編』、大槻玄沢編著の『環海異聞』、青地林宗訳の『奉使日本紀行』『輿地誌略』『地学示蒙』、村上貞助訳の『モール陳情書』そして天保7(1836)年の『和蘭風説書』などである<sup>(14)</sup>。

このような引用文献の豊富さや天保7年の風説書といった最新情報を導入して完成した点では、『外国事情書』は当時の海外情報の情報源としての役割をおおいに果たした書といえよう。特に、本書は新資料である多くの蘭書に依拠し、海外情報の枠の拡大に努めたことに特長がある。当時海防に関心を抱いていた崋山は、18世紀のイギリス資本主義によるアジア進出に危機感を持っていたようである。したがってかれの海外事情研究は、もはや「ゼオガラヒー」「プリンセン」といった単独情報ではその限界を感じ、複数情報の集積に尽力したことになる。こうして『外国事情書』は著され、複数情報を集積したものとして成立した。

では、『外国事情書』に使用された新資料の蘭書とはどのようなものであったのだろうか。ここでは崋山が利用したことがはっきりしている(1)「コーラント」、(2)「ソムル」、(3)「カルテン、アールキューンテ」、(4)「略志」、(5)「ブーランズゾーン」、(6)「ニューエンホイス」の6種類について検討することにする。

(1)「コーラント」。これは、「ゼオガラヒー」の著者ヒュペネルが編集した百科事典の蘭訳本である。全部で3種類あり、その書名は次の通りである。

(a) *De Staats-en Kouranten-Tolk of Woordenboek der Geleerden en Ongeleerden*. Leyden, 1732<sub>(15)</sub>.

(b) *De Nieuwe, vermeerderde en verbeterde Kouranten-Tolk, of zakebyk historisch-en Staatkundig Woordenboek*. Leyden, 1748<sub>(16)</sub>.

(c) *Algemeen Kunstwoorden-Boek der Wetenschappen, dienende tot de tweede deel van de Staats en Kouranten-Tolk*. Leyden, 1763<sub>(17)</sub>.

山村才助は『増訳采覧異言』の中で「コーラント」を「万国伝信紀事」として引用しているが、華山の引用が原書からかあるいは訳本からかは判明できない。

(2) 「ソムル」。J. G. Sommer の宇宙についての総説で、*Tafereel van het heelal, of bevattelijke en onderhoudende beschouwing van het uitspansel en van den aardbol*. Amsterdam, 1829-'36, 7dln. がこれにあたる<sub>(18)</sub>。ソムルの著作は当時かなり需要の高かった書であることが、その輸入状況からも窺える。

すなわち、「ソムル」は管見の範囲でも以下の通り輸入されている。

天保 8 (1837) 年 De Twee Cornelissen (Capt. S. Veenstra) shipped in case 13: ... Sommer. *Tafereel van't Heelal*, 6 vols.<sub>(19)</sub>

嘉永 4 (1851) 年 「タフェレール ファン ヘット ヘールアル 一部但三冊, 但万物の事を記すソムル名人著述, 一八四八年と一八四九年の版」<sub>(20)</sub>

嘉永 6 (1853) 年 「タフェレール ファン ヘット ヘールアル 一部但二冊, 但万物の事を記す書, ソムル名人著述, 一八四八年版」<sub>(21)</sub>

嘉永 7 (1854) 年 「タフェレーレン ファン ヘット ヘールアル 七冊, 但諸説を集たる書, ソムル名人著述, 一八二九年と一八三六年迄の版」<sub>(22)</sub>

華山が引用した「ソムル」はいつ頃輸入されたものであるかは判然としないが、天保 8 年に輸入されたものと考えるのが、『外国事情書』の成立年から考えれば妥当であろう。

(3) 「カルテン, アールキュンテ」。これについては特定困難であるが, J. N. Calten の著作を指すのではないかと思われる。カルテンには、*Leiddraad bij het onderrigt in de Zee-Artillerie*. Delft, 1832. という海外砲術関係の著作があるが<sub>(23)</sub>, これと「アールキュンテ」が関係あるか否かは不明である<sub>(24)</sub>。

(4) 「略志」。これは「プリンセン」の著作である *Geographische oefeningen* を指す。ここでは小関三英の『新撰地誌』からの情報を使用したのであろう。

(5) 「ブーランズゾーン」。「ブーランズゾーン」「ブーランツメン」とも表記されているが、これは Jacobus van Wejk Roelanszoon の世界地理辞典 *Algemeen aardrijkskundig Woordenboek, volgens de nieuwste Staatkundige veranderingen, en de laatste, bes-te en zekerste berigten*. Dordrecht, 1821-'23. である<sub>(25)</sub>。本書は全 7 巻の地理学辞典であるが、学術的にも高水準のものであり、蘭学者間でもかなり読まれていた書である<sub>(26)</sub>。しかし遺憾ながら、本書の輸入についての記録は管見の範囲では見出すことはできなかった。

(6) 「ニューエンホイイス」。「ニューエンホイイス」「ニューエンホイイス」と記載されていることもあるが、Gerrit Nieuwenhuis の学芸辞典のことである。これには正編と補遺編があり、『外国事情書』に使用されたのは次の書である。

(a) *Algemeen Woordenboek van Kunsten en Wetenschappen, voor, den beschaafden stand en ten behoeve des gezelligen levens.* Zutphen, 1820-'29. (正編)<sup>(27)</sup>

(b) *Aanhangsel op het algemeen Woordenboek van Kunsten en Wetenschappen.* Nymegen, 1833-'44. (補遺編)<sup>(28)</sup>

これは全17冊(正編8冊・補遺編9冊)で構成されているが、華山はこのうち1834年刊行の補遺編3巻までを使用した事が確認されている<sup>(29)</sup>。またこの書も当時かなり読まれていた書籍であった事が輸入リストより窺える<sup>(30)</sup>。

以上、渡辺華山の『外国事情書』中に引用された蘭書の一部を簡単に検討してみた。先に述べたように、華山自身はオランダ語の素養はなかったが、その交友関係、すなわち高野長英・小関三英・鷹見泉石などを通じて翻訳の協力を得ていた模様である<sup>(31)</sup>。

華山の『外国事情書』は、その意味で、今迄の「ゼオガラヒー」「プリンセン」などの地理書による情報から、総合的な百科事典などからの情報を必要とする段階を迎えた時代の先駆的書であり、海外事情研究の集成本のはじめといえよう。

## 2. 箕作省吾と『坤輿図識』

渡辺華山の『外国事情書』に始まる海外事情研究の集成本形式は、箕作省吾の『坤輿図識』が成立する弘化年間になると、編集目的の定まった「情報集成本」となっていく。「蛮社の獄」による蘭学の弾圧以後アヘン戦争の敗北を機に、日本における対外危機感は大きな変化を遂げた。殊に蘭学の分野では、幕府の政策変化に伴って、相次いで来航する異国船に備えるための予備知識としての海外情報の摂取が急務となってきた。この中で執筆されたのが『坤輿図識』である。

本書は弘化元(1844)年に箕作省吾が脱稿、翌2年に公開された。箕作省吾は津山藩出身の洋学者、箕作阮甫の門人であったが後にその才をかわれ箕作家の養嗣子となった人物である。この『坤輿図識』は省吾名で刊行されたが、養父である阮甫も少なからず関わりあったものとみられる<sup>(32)</sup>。

『坤輿図識』は全5巻3冊より成り、巻一は「亜細亞誌」、巻二は「欧邏巴誌」、巻三は「亜弗利加誌」、巻四上が「南亞墨利加誌」、巻四下が「北亞墨利加誌」、巻五が「豪斯多辣利誌」より構成され、アジアを重点的に記している。これはこの時期に中国のアヘン戦争での敗北が伝達され、アジアに対する認識が新たにされたことに大きく影響されているようである。すなわち、省吾は本書作成にあたって五大洲の配分を意図的に行ったことをその「凡例」によって明らかにしている。

つまり、「今迄は欧邏巴を中心にして<sup>アフリカ</sup>亜細亞や<sup>アフリカ</sup>亜弗利加を次にし、<sup>アメリカ</sup>亜墨利加になると概略のみになってしまう。豪斯多辣<sup>ヨーロッパ</sup>里洲諸島に至っては日本の近海なのに言及する者は少ない。この書では従来の記述の乏しいものを専らあげ、<sup>ヨーロッパ</sup>欧邏巴については国勢の変革や人口についてのみにとどめたい。」と述べている<sup>(33)</sup>。

さて、このような意図で執筆された『坤輿図説』が使用した引用文献を具体的に考察してみよう。『外国事情書』においては議論の信憑性を裏付けるため、典拠を示すという形で蘭書を挙げているが、『坤輿図説』では「引用西書」として巻頭に掲げている。それらは、(1)「ニウウエンホイス 十本」、(2)「プロイニング 四本」、(3)「プリンセン 一本」、(4)「ゼオガラヒー 一本」、(5)「ゲーレウ・ト 一本」、(6)「カンペン 一本」、(7)「ウェイランド、ヲ・ルデンブーク 五本」の7種類である。

(1)「ニウウエンホイス」。これは『外国事情書』にも引用されていたニューエンホイスの学芸辞典のことである。渡辺崋山が利用したのは、正編・補遺編17冊中補遺編の3巻までであったが、ここでは「十本」とあるので補遺編2巻までを利用したと解釈すべきであろうか。

省吾が「引用西書」の中で「本」をどのような意味で使用したのか不明ではあるが、冊数と解釈するのが妥当かと思われる。従ってこの場合、「十本」は10冊と解釈してよいだろう。ニューエンホイスの著作は『外国事情書』成立以前よりかなり輸入されていた模様であるが、10冊が輸入されたかどうかは不明である。ただ改訂版 *Nieuwenhuis' Woordenboek van Kunsten en Wetenschappen, herzien, omgewerkt en vermeerderd tot verspreiding van kennis en bevordering der beschaving onder alle standen*. Leyden, 1855-'68, 10 dln. が存在することは確認できる<sup>(34)</sup>。

(2)「プロイニング」。これは G. Bruining の著作 *Algemeene aardrijkskundig woordenboek*. Rotterdam, 1821-'22, 4 dln. のことである<sup>(35)</sup>。「四本」という記述とも一致する。

(3)「プリンセン」。『外国事情書』中では「略志」と記されていたプリンセンの著作である。ここでは第四版(1834年本)か第五版(1845年本)のいずれかを使用したものとみられるが、第四版の可能性が高い<sup>(36)</sup>。

(4)「ゼオガラヒー」。これはヨハン・ヒュブネルの代表的な著作であるが、増補・改訂を繰り返したので多くの版本が存在する。ここでは「一本」とあるので、1711年蘭訳再版本の *Kort Begryp der Oude en Nieuwe Geographie* (すなわち1冊本「ゼオガラヒー」)を使用したと解釈することになるが、時代的に古いのでやはり「ニウウエンホイス」同様増補版6冊本「ゼオガラヒー」の一部を利用したと考える方が良いかもしれない<sup>(37)</sup>。

(5)「ゲーレウ・ト」。これは特定困難であったが嘉永6(1853)年の輸入書の中に次のような記述がある。

一、アールドゴローベ 一部但一冊

但、地球の事を記たる書、ゲールフト名人著述、一八二六年版<sup>(38)</sup>

『坤輿図説』の成立は嘉永6年以前であるから、この書が該当するかは定かでない。しかしこの書の成立年(1826年)から考えれば、日本に嘉永6年以前に輸入された可能性も十分ある。

(6)「カンペン」。これは、Nicolaas Godfried van Kampen の著作を指す。引用されたと思われる書籍は *De Aarde beschouwd in haren natuurlijken toestand en*

*verdeeling door zeeën, rivieren, meeren, bergen en woestijnen*. Haarlem, 1816. である<sup>(39)</sup>。

(7) 「ウェイランド、ヲ、ルデンブーク」。これは P. Weiland の著作を指す。ウェイランドの著作はほとんどが言語辞典であり、当時の輸入の記録によると、「五本」に該当するのは以下の通りである。

天保 3 (1832) 年 The vessel Japan (Capt. P. C. De Roth) transported (case 27):  
…: Weiland. *Nederl. taalk. woordenboek*, 5 vols. each.<sup>(40)</sup>

天保 4 (1833) 年 The Princes Marianne (Capt. Jacob Admiraal) transported:  
Weiland. *Handwoordenboek*, 5 vols. …<sup>(41)</sup>

『坤輿図識』の成立年から考えれば 2 つともに対象となりえるが、この書はオランダ語学辞書であるので該当するかどうか疑問である。ウェイランドの他の著作で該当しそうなものは、以下の通りである。

(a) *Kunstwoordenboek*. Dordrecht, 1846. 2de druk.<sup>(42)</sup>

(b) *Kunstwoordenboek*. Dordrecht, 1858. 3de druk.<sup>(43)</sup>

(c) *Kunstwoordenboek*. 's-Gravenhage, 1824.<sup>(44)</sup>

(d) *Supplement op het Kunstwoordenboek*. Rotterdam, 1832.<sup>(45)</sup>

このうち(a)(b)(c) 3 冊は技術辞書であり、(d) 1 冊はその補遺版である。箕作省吾が『坤輿図識』を編集するにあたって使用したとすれば、単なる語学辞書よりも技術辞書を使用したのではないかと思われる。ただ、「五本」とあるのをどのように解釈するのか疑問が残る。

以上、『坤輿図識』の引用文献について簡単に紹介してきたが、これらの引用文献の多くは辞典や地理書である。もちろん『坤輿図識』自体が地理書であるから当然であるが、この時代にも依然として「ゼオガラヒー」「プリンセン」といった地理書が使用されていたことは、類書が少なかった故かもしれないが、当時の人々にとって不可欠な資料であったことを示している。しかし『坤輿図識』が「ニウウエンホイス」といった学芸辞典をはじめ多くの書籍からの情報を集積していったことは、それまでの地理書の水準を超えるものであり、世界についてのより正確な知識を提供することに大きな貢献を果たした。

『坤輿図識』は『外国事情書』が著されてから僅か 6 年後に著された。にもかかわらずそれが引用西書を集成し独自の編集を行った地理書となったことは、時代の趨勢といふべきであろうか。確かに「蛮社の獄」で弾圧された蘭学は、アヘン戦争をはじめとする対外危機感の中で再評価される。まさしくこの状況下で成立した本書は、西洋と対立するアジアという現実認識の中で編集されたものであり、それ故にアジアを重点的に記述するといった方法をとったのである。この点で本書は崑山の『外国事情書』よりも一歩進んだ「情報集成本」といえよう。

### 3. 『坤輿図識補』小考

『坤輿図識補』は、箕作省吾が『坤輿図識』の補編として構想し、弘化 3 (1846) 年

に脱稿した全4巻4冊本である<sup>(46)</sup>。省吾自身は、本書を病褥の上で識したことをその巻頭の「附言」の中で記しているが、成稿後の年末に不帰の人となった。したがって病褥にあった省吾の執筆活動を養父である箕作阮甫が助力したであろうことは容易に推測できる。本書は『坤輿図識』で取り上げられなかった箇所を重点的に補足することを目的にしている。即ち巻一は地理書としての総括というべき「輿地総説」から開始される。以下巻二は「米利幹誌補」、巻三は「歐邏巴誌補」、巻四は「本編中所収人物略伝」となっている。この中で巻四を除く大部分が、軍事に関する事項を集中的に記していることは注目に価する。たとえば、巻二「米利幹誌補」では合衆国の海軍について取り上げ、巻三「歐邏巴誌補」ではロシア・フランス・イギリスの陸海軍統計を取り上げている<sup>(47)</sup>。

このように軍事情報が強化されたのは、オランダ国王の開国勧告をはじめとする一連の外圧の中で本書が成立したことによるのかもしれない。すなわち本書成立年にはアメリカ東インド艦隊司令長官ビートルが浦賀に来航し、ようやく幕府が海防防備に関して本格的な対応を行い始めたという事実があった。では具体的に『坤輿図識補』に利用された引用文献を検討することにしたい。

『坤輿図識補』においても、『坤輿図識』と同様に「引用西書」を巻頭に掲げている。すなわち、(1)「ニウウエンホイス」、(2)「子ーデルランツセマガセイン」、(3)「ハンデルペール」、(4)「チュッケース」、(5)「プロイニング」、(6)「ルウランスゾラン」、(7)「メルキワールヂフレイド」、(8)「カムペン」である。『坤輿図識』では引用文献には「本」数が記されていたが、ここでは八種とのみある。ここで注目すべきは書籍のみでなく雑誌を取り入れたことであろう。

(1) 「ニウウエンホイス」。これは『坤輿図識』で使用されたニューエンホイスの学芸辞典である。ここでは *Algemeen Woordenboek van Kunsten en Wetenschappen, voor den beschaafden stand en ten behoeve des gezelligen levens* を使用している<sup>(48)</sup>。

(2) 「子ーデルランツセマガセイン」。これはアムステルダムで大衆向けに出版された学術啓蒙雑誌であり、原書は *Nederlandsch Magazijn, ter verspreiding van algemeene en nuttige kundigheden*. Amsterdam, 1834-'45. である<sup>(49)</sup>。日本にもかなり輸入されており、その輸入状況の大略は以下の通りである。

嘉永元(1848)年 子ーデルランドマガセイン 1冊 但、和蘭諸説を集る書 1844年以後の版…<sup>(50)</sup>

嘉永3(1850)年 In 1850 the Shōgun received: … *Nederlandsch Magazijn*.<sup>(51)</sup>

嘉永4(1851)年 In 1851 the Shōgun received: … *Nederlandsch Magazijn* for 1849.<sup>(52)</sup>

嘉永5(1852)年 In 1852 the Shōgun received: … *Nederlandsch Magazijn* for 1850.<sup>(53)</sup>

嘉永6(1853)年 In 1853 the Shōgun received: … *Nederlandsch Magazijn* for 1851 and 1852.<sup>(54)</sup>

安政元(1854)年 In 1854 the Shōgun received: … *Nederlandsch Magazijn* for

1853.<sup>(55)</sup>

安政 2 (1855) 年 In 1855 the Shōgun received: ... *Nederlandsch Magazijn* for 1854.<sup>(56)</sup>

安政 4 (1857) 年 In 1857 the Shōgun received: ... *Nederlandsch Magazijn* for 1855.<sup>(57)</sup>

以上のようにほとんど毎年のように新しい情報＝雑誌が輸入されている。しかしこの雑誌を日本語訳して紹介したのは箕作省吾が最初であり、その点では『坤輿図識補』は最新情報を駆使して作成された書籍といえる。その後、番書調所において『官版玉石志林』が刊行されるが、その中で「子ーデルランツセマガセイン」は「和蘭宝函」と和訳されて引用されている。

(3) 「ハンデルペール」。これは、R. van der Pijl の著作のことでここでの引用は *Eerste Beginselen der Staatskundige Aardrijksbeschrijving ten Dienste der Scholen*. Dordrecht, 1823. という地政学に関する入門書である<sup>(58)</sup>。ハンデルペールの著作は他にもあるが、ほとんどが語学に関するもので、地理書としてはこれのみである。

(4) 「チュッケース」。James Hingston Tuckeys の著作で、*Aardrijkskunde voor Zeevaart en Koophandel*. Rotterdam, 1819, 5dln. がこれにあたる<sup>(59)</sup>。国立国会図書館所蔵本にはシーボルトが高橋景保へ送った献辞があり、同書の来歴から考えて省吾が「シーボルト事件」で没収された書を利用した可能性が強い。

(5) 「ブロイニング」。これは『坤輿図識』の中でも引用されていた G. Bruining の著作である。

(6) 「ルウランスゾオン」。これは Jacobus van Wijk Roelanszoon の著作を指す。ルーランスゾーンは一連の辞典を編纂しているが、それは次の通りである。

(a) *Algemeen aardrijkskundig Woordenboek; volgens de nieuwste staatkundige veranderingen, en de laatste, bes-te en zekerste berigten*. Dordrecht, 1821-'23. 7dln.<sup>(60)</sup>

(b) *Supplement op het algemeen aardrijkskundig Woordenboek*. Amsterdam, 1836-'42. (補遺編)<sup>(61)</sup>

(c) *Algemeen wetenschappelijk Woordenboek*. Nijmegen, 1834-'46. 2dln.<sup>(62)</sup>

この中で『坤輿図識補』に引用されたと思われるのは、成立年代から考えれば(a)と(b)ということになる。しかしルーランスゾーンにはこの他にも、*Beknopt Aardrijkskundig Schoolboek voor de Jeugd, volgens de Nieuwste Landverdeeling*. Tweede druk. Zutphen, 1820. という地理の教科書があり使用された可能性もある<sup>(63)</sup>。しかし、もっとも使用された可能性が強いのは、後に箕作阮甫が著した『八紘通誌』で引用した「ハンドレイザング、トット、デ、アールドレイクスキュンデ」ではなかろうか。これは *De oppervlakte der aarde, of handleiding tot herinneringslessen over de aardrijkskunde*. Kampen, 1841. のことであろう<sup>(64)</sup>。また「島津家文書」中の「舶載書籍銘書」中からはルーランスゾーンの著作は見出せず、したがって輸入された年代から該当書籍を割り出すことは困難であった。

(7) 「メルキワーヂフヘイド」。これは特定困難であるが *Kronijk van onze tijd merkwaardige gebeurtenissen onzer dagen, op het gebied van staatkunde, geschiedenis, Land- en volkenkunde, kunsten, wetenschappen, nijverheid, enz.* Amsterdam, 1852-'55. のことであろうか<sup>(65)</sup>。当該年代の出版物で「メルキワーヂフヘイド」という書名を持つものには他にも N. Anslijn の *Merkwaardigheden betreffende de natuur, en aardrijkskunde, ter bevordering van Algemeene kundigheden, ten gebruike in de scholen. 2de druk.* Leyden, 1838-'39. 4dln. があるが、これは自然科学分野の書籍であるので引用文献としては考えにくい<sup>(66)</sup>。「メルキワーヂフヘイド」も「島津家文書」中の「舶載書籍銘書」中にないため、年代からの特定は困難である。

(8) 「カンペン」。これは『坤輿図識』で引用されたカンペンの著作であろう。

以上『坤輿図識補』の引用文献について簡単に検討したが、ここで『坤輿図識』と比較すれば、『坤輿図識』は引用文献7種類中地理書からと思われるのが5種で、残りが辞典類となっている。これに対して『坤輿図識補』は、8種類中地理書からと思われるのが6種であるが、この中には単なる地理書ではなく地理学辞典も含まれ、さらに残りは辞典と雑誌になっている。今迄の情報源は、書籍からであったがここにきて雑誌からの情報が導入されたのは画期的なことである。情報源として雑誌を用いたのはより早く海外情報を入手しなければならないという当時の社会情勢の反映であろうか。こうしてみると『坤輿図識補』は、『坤輿図識』の情報をさらに最新情報を以て深めた「情報集成本」としての役割を担ったといえるであろう。

#### 4. 『八紘通誌』小考

最後に『八紘通誌』について述べる。『八紘通誌』は、箕作阮甫が省吾亡き後『坤輿図識』『坤輿図識補』の脱漏部分を補足する意味で脱稿したもので、箕作一族による地理書の集大成といってもよい。本書はその名称からもわかるように世界地誌を指向するものであった。しかし刊行されたのは「欧邏巴部」のみにすぎない<sup>(67)</sup>。「箕作文書」(国立国会図書館)中にはアジア誌の一部の原稿が残されており、全世界をカバーする予定であったらしい<sup>(68)</sup>。したがって、刊行物としての『八紘通誌』はこれらの遠大な計画の第一期に相当するものであろう。

本書は初編三巻が嘉永4(1851)年刊、二編三巻が安政2(1855)年刊となっている全6巻6冊本である。初編成立直後にはペリー来航があり、また二編成立時には日米和親条約が締結された(1854年)。幕府内部においては開国という新しい事態の中で、世間の攘夷論争の高揚もあり西洋文献からの翻訳に関して敏感となっていた。したがって、この時期の出版物は幕府による検閲が行われた。この中で『八紘通誌』は2回に分けて刊行され、初編3巻3冊が嘉永4年に、二編3巻3冊が安政2年に出版された訳である。『八紘通誌』初編は、杉田成卿の『地学正宗』と同時に許可されているが、性質の異なった2種の本が同時に刊行されているのは興味深い<sup>(69)</sup>。

さて内容について簡単に紹介してみよう。初編は国別に記され、二編は「三大洲連絡北極心の国」「嶋」「山」「火山」「岬」等主題別に記されている。ここで阮甫は「国」

という縦型の分類と主題別という横型の分類を行って、世界を立体的にみようという編集意図を明確にしている。さらに引用文献は「凡例」に記されているが、『坤輿図識』『坤輿図識補』に比べてより詳細に、すなわち書名、内容説明、出版年などが記されている。では早速「引用書目」を検討することにしよう。

- (1) 「ベシケレイヒング、ファン、ベルギー、白耳義地志、天保十二年排刷(刊行の意一筆者) 1冊」
- (2) 「ヘルデンダーデン、デル、ホルランダス、シンズ、デ、アフファル、デル、ベルギー、白耳義叛乱以来、和蘭人武勇記、天保四年排刷 1冊」
- (3) 「ハイドレイヂング、トット、デ、アールドレイクスキュンデ、ウエイキ、ルーランスゾーン著、地学指南二冊、文政七年八年排刷、<sup>ネーデルラント</sup> 渥弟耳蘭田、<sup>オロス</sup> 鄂羅斯ノ国、各一頁ヲ挿入ス」
- (4) 「アルゲメーン、ヨーフルシクト、デル、フェイフウェーレルデン、五大洲通覧無名氏著、弘化元年、瓜哇三寶龍排刷、1冊」
- (5) 「ニウウェンホイス、アルゲメーン、ウヲールデンブーク、ファン、キュンステン、エン、ウェーテンカップン、<sup>ニューエンホイス</sup> 紐宛斐氏學術韻府、文政十二年ヨリ、天保七年ニ至ル、余卷毎年続刻、正編7冊、続編現刻3冊」
- (6) 「アルゲメーン、ア・ルドレイクス、キュンヂフ、ウォールデンブーク、プロイニング著、文政四年五年排刷、本編並増補合4冊」
- (7) 「ミリタイル、サックブーク、軍中袖珍書、1冊、プロイン著、天保十年排刷」
- (8) 「フルゲレイキング、ファン、ヨンドルシケイデ子、ピン子シ、エン、ホイテンランシエ、ゲウィクテン、マーテン、エン、ミュンテン、メット、ニウウユ、子一デルランツェ、プロイニング著、文政五年排刷、内外邦土ノ道程、錢貨權衡度量ヲ以、和蘭今有ル所ト比較スル表」
- (9) 「アールデ、ベスコウド、イン、ハーレン、ナチュールレイケン、ツアーアウトド、エン、フルデーリンゲン、カムペン著、文政八年排刷、地理略考1冊」
- (10) 「コロノギース、ハンドブーク、ファン、デ、ゲシキーデニス、デル、ホールナムステ、スターテン、ヨウデマンス著、文政七年排刷、各国編年小史」
- (11) 「スコール、アタラス、万国地図1冊、天保七年、独逸ゴッター府、鏤刻」
- (12) 「ハンド、アタラス、同大本1冊弘化四年、独逸ゴッター府、鏤刻」の12種類である。

(1) 「ベシケレイヒング、ファン、ベルギー」。これは *Beschrijving van België*. Amsterdam, 1841. である<sup>(70)</sup>。「天保12(1841)年排刷」とあるので1841年の出版と一致する。しかし、書籍輸入の記録から本書を見出すことはできない。

(2) 「ヘルデンダーデン、デル、ホルランダス、シンズ、デ、アフファル、デル、ベルギー」。これは *Heldendaden en edele karaktertrekken der Hollanders, sinds den afval van België in 1830*. Amsterdam, 1833. のことである<sup>(71)</sup>。1830年におけるベルギーのブリュッセルで起った革命について書かれたものであろうか。この書籍自体も輸入年代等については記録がない。

(3) 「ハンドレイダング, トット, デ, アールドレイクスキュンデ, ウエイキ」。これは『坤輿図識補』の「ルウランスゾラン」で取り上げた *De oppervlakte der aarde, of handleiding tot herinneringslessen over de aardrijkskunde*. Kampen, 1841. のことである。ここでは「文政7年8年(1824-'25) 排刷」とあるので異版本が輸入されていたことが窺われる。

(4) 「アルゲメーン, ヲーフルシクト, デル, フェイフウェールデン」。これは特定困難であり、『八紘通誌』中でも阮甫が「無名氏著」と記している。しかし「五大洲通覧」とあるので、世界の概要を記した書であったと思われる<sup>(72)</sup>。

(5) 「ニウエンホイス, アルゲメーン, ウヲールデンブーク, ファン, キュンステン, エン, ウェーテン スカッペン」。これはたびたび登場するニューエンホイスの学芸辞典である。ここで注目したいのは、「文政十二年ヨリ天保七年ニ至ル餘卷毎年続刻, 正編七冊, 続編現刻三冊」という語である。すなわち箕作省吾が『坤輿図識』の「引用西書」において「ニウエンホイス, 十本」と記しているが、この箇所から考えれば正編7冊と続編3冊の計10冊を用いたと解釈してよいこととなる。

(6) 「アルゲメーン, ア・ルドレイクス, キュンダフ, ウォールデンブーク」。これは『坤輿図識』の「引用西書」で用いられたプロイニングの著作 *Algemeene aardrijkskundig woordenboek* の事である。

(7) 「ミリタル, サックブーク」。これは A. W. de Bruyn の著作 *Militair zakboekje ten dienste van het Nederlandsche leger, doch meer bijzonder van het wapen der artillerie*. 's-Gravenhage, 1839. を指す<sup>(73)</sup>。本書は天保7(1836)年に輸入されたことが明らかである。

In 1836 the Mary en Hillegonda (Capt. D. A. de Jong) shipped: ... The same ship carried: ... de Bruin. *Militair zakboekje*.<sup>(74)</sup>

(8) 「フルゲレイキング, ファン, ランドルケイデ子, ピン子, エン, ボイテンランツェ, ゲウィクテン, マーテン, エン, ミュンテン, メット, ニウウエ, 子—デルランツェ」。これはプロイニング著の *Vergelijking van onderscheiden binnen- en buitenlandsche gewigten, maten en munten, met nieuwe Nerderlandsche*. Rotterdam, 1823. である<sup>(75)</sup>。

(9) 「アールデ, ベスコウド, イン, ハーレン, ナチュールレイケン, ツーアウタンド, エン, フルデーリングン」。これは『坤輿図識』で引用されたカンペンの *De Aarde beschouwd in haren natuurlijken toestand en verdeeling door zeeën, rivieren, meeren, bergen en woestijnen* である。「文政8年排刷」とあるので、これは第二版(1824年)からの引用と思われる。

(10) 「コロノギース, ハンドブーク, ファン, デ, ゲシキーデニス, デル, ホールナムステ, スターテン」。これは A. C. Oudemans の著作 *Chronologisch handboek van de geschiedenis der voornaamste staten*. Haarlem, 1824. のことである<sup>(76)</sup>。これも輸入された年代について明らかでない。

(11) 「スコール, アタラス」, (12) 「ハンド, アタラス」。これらは地図であるが、そ

れぞれ *School-atlas van alle deelen der aarde*. Rotterdam, 1839.<sup>(77)</sup> と *Hand-atlas (Kleine) van de aarde*. Rotterdam, 1842.<sup>(78)</sup> にあたるのではないと思われる。しかし「独逸ゴッター府、鏤刻」とあるので上記のロッテルダムでは合わない。次に記すスチーラーの蘭訳本とも考えられるが、作者がわからないので不明である。「ゴッター」版の地図では Adolf Stieler の *Hand-Atlas über alle theile der erde nach dem neuesten zustande und über das weltgebäude*. Gotha, 1823. があるが、これは「弘化四年」と合わない<sup>(79)</sup>。この地図の作者であるスチーラーの地図は、当時のヨーロッパ地図の最新精図で、鷹見泉石や佐久間象山が所持していたといわれる。いずれにしても、箕作阮甫は当時のヨーロッパにおける最新地図を入手して『八紘通誌』を編集したわけであるが、おそらくスチーラーの地図の異版を用いたと考えるのが妥当であろう<sup>(80)</sup>。

以上『八紘通誌』に引用された書籍を紹介してみた。『坤輿図識』『坤輿図識補』の時代に比べれば引用文献がさらに豊富になったこと、また地図が導入されたこと等が注目される。また初編と二編に分けてそれぞれを総論と各論のように分類しているところも前2書と違って目新しい点である。だが阮甫は『八紘通誌』を省吾の『坤輿図識』『坤輿図識補』と連続性を有する地理書として位置づけを行っている<sup>(81)</sup>。これは引用文献の多くを『坤輿図識』あるいは『坤輿図識補』から踏襲していることから明確である。

しかし本書成立時期である嘉永から安政にかけては、ペリー来航(1853年)をはじめ中国における太平天国の乱の勃発(1851-'64年)など、その情報が伝来し世情がめまぐるしく変化した時期であり、こうした状況の中で、まず侵略者としてのヨーロッパ(とくにイギリス)を意識して「欧邏巴部」が最初に完成をみたのであろう。また先に指摘したように「箕作文書」中にアジアの部の稿本が残されているが、これは阮甫がペリー来航頃に読んだ蘭書の地理書を通じて、アジアにおけるイギリスの脅威を感じていたためであり、この脅威が阮甫をしてアジアの部を作成せしめることになったと思われる<sup>(82)</sup>。

『八紘通誌』は結局ヨーロッパの部のみの発行となったが、阮甫の構想を推察すれば今迄に類をみない大規模な編纂された地理書といえよう。

### III. む す び

「蛮社の獄」直前からペリー来航直後に至る時期の我国における蘭書の輸入と受容について、『外国事情書』『坤輿図識』『坤輿図識補』『八紘通誌』といった例を挙げて検討してきた。『外国事情書』成立(1839年)から『八紘通誌』成立(1851年)までの12年間という短期間に、蘭学界は、「蛮社の獄」での弾圧、アヘン戦争敗北とその伝達による蘭学の再評価、そしてペリー来航に伴う攘夷運動と開国による洋学としての再編成と、世情のめまぐるしい動きに対応する形で変化していった。もちろん海外情報もこうした世の中の変化にしたがって枠の拡大に努めていくとともに、内容的にも従来

の地理的な情報から脱却して幅広い最新情報を摂取することが必要となってきた。こうした変化は『外国事情書』から『八紘通誌』に至る「引用書目」の内容からも明らかである。

最後にそれぞれの「引用書目」を分野別に示すと以下のようになる。

天保8(1837)年 モリソン号事件

天保10(1839)年 『外国事情書』

「コーラント」：百科事典	}		
「ソナムル」：宇宙の総説(自然科学)			
「カルテン, アールキュンテ」：地質学カ		辞典	2
「略志」：地理書		地理書	4
「ブーランズゾーン」：世界地理辞典			
「ニューエンホイス」：学芸辞典			

同年 蛮社の獄

1840-'42年 アヘン戦争(→天保の薪水令)

弘化元(1844)年 『坤輿図識』

「ニウウェンホイス」：学芸辞典	}		
「プロイニング」：地理書			
「プリンセン」：地理書			
「ゼオガラヒー」：地理書		辞典	2
「ゲーレウ・ト」：地理書カ		地理書	5
「カンペン」：地理書			
「ウェイランド」：辞書			

弘化3(1846)年 米使ビートル, 浦賀に来航

弘化3-4年 『坤輿図識補』

「ニウウェンホイス」：学芸辞典	}		
「子ーデルランツセマガセイン」：雑誌			
「ハンデルペール」：地政学		辞典	1
「チュッケース」：地理書		地理書	6
「プロイニング」：地理書		雑誌	1
「ルウランスゾラン」：世界地理辞典			
「メルキワールヂフヘイド」：地理書カ			
「カムペン」：地理書			

嘉永年間 幕府, 海岸防備を強化

嘉永4(1851)年 『八紘通誌』初編

「ベシケレイヒング……」：地理書カ	}		
「ヘルデンダーテン……」：歴史書			
「ハンドレイヂング……」：地理書		辞典	1
「アルゲメーン……」：地理書カ		地理書	6

「ニウウェンホイス……」：学芸辞典  
「アルゲメーン……」：地理書  
「ミリタイル……」：軍事学  
「フルゲレイキング……」：内外事情書カ  
「アールデ……」：地理書  
「コロノギース……」：歴史書  
「スコール，アタラス」：地図  
「ハンド，アタラス」：地図

歴史書	2
地図	2
軍事	1

嘉永6(1853)年 ペリー来航

安政元(1854)年 日米和親条約

安政2(1855)年 『八紘通誌』二編 (嘉永4年に同じ)

安政5(1858)年 日米修好通商条約

このような海外情報の受容は、初期の辞典・地理書の使用の段階から、時代を経るにしたがって雑誌・歴史書・地図等広い分野からの情報を入手し、内容的にも精密さを増し学問的価値の高いものとなっていく。また『外国事情書』『坤輿図識』においては、従来から蘭学界で読まれ続けてきたヒュブネルやプリンセンの地理書が依然として用いられているが、異国船の相次ぐ来航や幕府の対外危機感の覚醒によって、『坤輿図識補』『八紘通誌』の時代になると「子デルランツセマガセイン」「ミリタル，サックブーク」といった最新の情報への転換が行われていく。

以上のように考えていくと『外国事情書』→『坤輿図識』→『坤輿図識補』→『八紘通誌』の「引用書目」は、時代の要求に応えるべく必要な情報を編集者が選びぬき、時局に対応すべき情報を摂取し、編集過程において情報を豊富にしていたことを示している。また同時に「引用書目」自体もその書名・内容・出版等の書誌情報を明記するようになり、編纂書としての体裁を整えていくようになる。『外国事情書』から始まった地理学の編纂書は、『八紘通誌』で一応の完成をみた。これらの地理書は蘭書からの情報に基づいて行われており、この意味で蘭書(特に地理書)は海外情報収集の上で大きな役割を果たしたといえる。蘭書の受容はもちろん地理書に限ったことではないが、最初は地理学的な情報から始まりやがて対外危機の中で砲学・兵学と様々な分野に拡大されていく。また言語辞書も輸入されるようになり、単に情報を受動的に摂取するのではなく、積極的に摂取していこうという動きも現われる。幕末における各藩藩校での洋学や塾塾をはじめとする教育機関での洋学はこの代表例であろう。

本稿では蘭書の輸入と受容について取り扱ったが、蘭書以外では漢籍からの影響が大きかったことは否めない。漢籍はアヘン戦争後、『海国図志』をはじめ『連邦志略』『英国志』『地理全志』『地球説略』『瀛環志略』などが挙げられるがこれらの受容を考え、蘭書と総合的に検討していくことは幕末期の海外情報を考察する上で必要なことであろう。

[付記]

末尾になってしまったが、本稿作成にあたって宮地正人氏（東京大学史料編纂所）・広瀬順皓氏（国立国会図書館政治史料課）より御助言・御教授を賜った。両氏に改めて謝意を表したい。また史料の閲覧に関しては、東京大学史料編纂所・金沢市立図書館近世資料室及び長崎市立博物館の原田博二氏にお世話になった。併せて深謝したい。

## 注

- (1) 海外情報の種類と入手方法にはこの他にも色々と考えられる。鳥井裕美子氏によれば、漂流民・潜入異国人からの聴取した情報、オランダ商館長・商館付医師等との会見で得られる情報、朝鮮使節がもたらした情報等をあげている。詳細については、鳥井裕美子「近世ヨーロッパ認識の二つの流れ」、『史学論叢』別府大学、20号、1990.2）を参照。
- (2) 「ゼオガラヒー」については、1冊本・3冊本・4冊本・6冊本の4種類が存在したことが知られている。内容については、石山洋「大地理学者ヒュペルをめぐって—近代地理学の曙と蘭学—（その2）」、『上野図書館紀要』3号）を参照。
- (3) アヘン戦争勃発の報は、天保11（1840）年6月に長崎に入港したオランダ定期船によってもたらされた。この情報は、定例の風説書とは別にバタビア総督の特命によって提出されたもので、別段風説書とよばれたものである。
- (4) 『海国図志』の和刻本は、笈作阮甫・塩谷岩陰のたずさわった官版翻刻本以外にも20数種出版されたといわれる。鮎沢信太郎・大久保利謙『鎖国時代日本人の海外知識』（乾元社、昭和28年）を参照。
- (5) 安政2（1855）年の洋学所成立は、開国による西洋文化認識の表われの一例と考えられる。洋学所は翌3（1856）年に蕃書調所と改称し、さらに文久2（1862）年に洋学調所、翌3（1863）年に開成所となる。ここでは諸分野にわたる洋学の様々な研究がなされた。維新後は大学南校から東京開成学校をへて東京大学となった。
- (6) 佐藤昌介『洋学史の研究』（中央公論社、昭和55年刊）、p. 16。
- (7) 旧幕引継資料目録類としては、『江戸幕府引継資料目録・蘭書』（国立国会図書館、以下『蘭書目録』と略す）、『江戸幕府旧蔵洋書目録』（静岡県立中央図書館葵文庫、以下『洋書目録』と略す）、『江戸幕府旧蔵蘭書総合目録』（日蘭学会編『江戸時代日蘭文化交流資料集』(二)、以下『総合目録』と略す）を使用した。
- (8) 阿蘭陀船の書籍銘書類としては、東京大学史料編纂所所蔵の島津家文書『阿蘭陀船り持渡候書籍銘書』（嘉永3年より嘉永7年、以下『阿蘭陀船り持渡候書籍銘書』については所蔵を略し、文書名及び書籍名のみ付す）と長崎市立博物館所蔵の『諸書留』（弘化3年より嘉永元年）を使用した。『阿蘭陀船り持渡候書籍銘書』は、来日したオランダ商館長、商館員や船員の所持する書籍の目録でこれらは日本で販売する目的で持渡ったものとみられる。『諸書留』は、長崎会所に設けられたオランダ通辞加役御用方による職務内容記録である。
- (9) オランダ側の資料としては、オランダ国立公文書館所蔵の日蘭貿易に関するマククリーン氏の調査論文 J. Mac Lean. The introduction of Books and Scientific Instruments into Japan, 1712-1854. *Japanese Studies in the History of Science*. no. 13, 1974, p. 9-68. を使用した。（以下 J. Mac Lean, 1974 と略す）。
- (10) 渡辺崋山の『新釈輿地図説』は執筆年代が不明であり、崋山が小関三英の『新撰地誌』を参考にしたか定かではないが、内容的には全く同一のものであるため第二版からの訳と思われる。また、嘉永4（1851）年刊行の杉田成卿『地学正宗』（金沢市立図書館蒼龍館文庫所蔵）も凡例に1817年版を底本としたとあり、第二版からの訳である。
- (11) Prinsen, P. J. *Geographische oefeningen*. 4de druk. Amsterdam, 1834, 385p. 及び Prinsen, P. J.

- Geographische oefeningen*. 5de druk. Zalt-Bommel, 1845, 385p. ともに国立国会図書館所蔵。(『総合目録』 p. 30.)
- (12) (6)に同じ。 p. 157-164.
- (13) 中山茂編『幕末の洋学』(ミネヴァ書房, 1984年刊) p. 10-14.
- (14) 佐藤昌介校注『外国事情書』(『日本思想体系』55巻所収, 岩波書店, 1971年刊) より特定できる漢籍及び日本人著作を抽出し, 作成した。
- (15) 「武雄の蘭書目録」(『武雄鍋島家歴史資料目録』所収, 武雄市教育委員会編, 1982年, 以下『武雄目録』と略す), p. 124.
- (16) 『蘭書目録』 p. 33.
- (17) (6)に同じ。 p. 181. ただし管見の範囲では輸入された記録はないが, 現在武雄高校に寄託されている。(『武雄目録』 p.124).
- (18) 『洋書目録』 p. 18.
- (19) J. Mac Lean, 1974, p. 48.
- (20) 『当亥阿蘭陀船と持渡候書籍銘書』(島津家文書)。
- (21) 『当丑阿蘭陀船と持渡候書籍銘書』(島津家文書)。
- (22) 『当寅阿蘭陀船と持渡候書籍銘書』(島津家文書)。
- (23) 『蘭書目録』 p. 14.
- (24) 「アールキュンテ」は 'aarkunde' のことで, 地質学を意味する。ここで紹介したカルテンは軍人で, 軍人が地質学と結びつくかどうかは不明である。
- (25) 『総合目録』 p. 38.
- (26) 「ブーランズソーン」は, 他にも「ウエイキ アールドレイクスキュンヂへ, ウワールテンブック 千八百二十二年 楓山 二冊」「ウエルキ アールドレイクス キュンヂへ, ウワールテンブック 千八百二十一年ヨリ四十二年 七冊 附録四冊添全十一冊」「アールドレイキ スキュンディゲ ウワールテンブック 但地理学辞書一部七冊 附録四冊添」など各種の版が残っている。(『総合目録』 p. 38).
- (27) 『総合目録』 p. 4.
- (28) 前掲書, p. 3.
- (29) (6)に同じ。 p. 189-190.
- (30) 『諸書留』(弘化5年) 及び島津家文書『当亥阿蘭陀船と持渡候書籍銘書』(嘉永4年) からは「ニューエンホイス」の書名を確認できる。
- (31) 高野長英・小関三英の協力による翻訳については, 佐藤昌介『洋学史の研究』p. 176-197参照。なお, 華山と親交があった古河藩家老鷹見泉石資料が, 近年古河歴史博物館(1990.11開館) に収蔵された。同文書の解明により, 華山のより詳細な交遊関係が明らかにされるのではないかと思われる。今後の解読作業に期待したい。
- (32) 「箕作阮甫の著訳書」(『箕作阮甫の研究』付録所収) において, 病弱の省吾を養父阮甫が援助したと指摘している。また辻田右左男氏は特に『坤輿図識』の豪斯多辣里洲(アウスタラリ) 諸島を記述する際には阮甫の『豪斯多辣利訳説』を参考にしたことを一例として挙げている。阮甫と省吾の著作をめぐる問題については, 辻田右左男『箕作省吾『坤輿図識』一著作をめぐる1, 2の問題一』(『奈良大学紀要』2号, 1973) を参照。
- (33) 『坤輿図識』(弘化2年, 夢霞楼蔵版, 国立国会図書館所蔵)「凡例」。但し原文は漢文のため, ここでは平易な日本語に訳した。
- (34) *The National Union Catalog, pre-1956 imprints*. London, 1975, vol. 419, p. 297.
- (35) 石山洋『箕作阮甫の地理学』(蘭学資料研究会編『箕作阮甫の研究』所収, 思文閣出版, 昭和53年刊) p. 213.
- (36) 第四版および第五版本は共に国立国会図書館所蔵。省吾はその「凡例」で「引用西書」は天保年間和蘭人の著作によると記している。これに従えば, 該当するのは第四版ということになる。なお第四版には番書調所蔵印が, 第五版には長崎東衛官許印が見出せる。(『総合目録』 p. 30.)

- 37) 6冊本「ゼオガラヒー」にのみ蕃書調所蔵印が確認できるため、ここでは可能性として指摘した。地理書としての情報機能は1冊本「ゼオガラヒー」でも十分果たせるように思われる。しかし、1冊本も6冊本も省吾のいう天保年間の作ではないので解釈の上では疑問が残る。
- 38) 『当丑阿蘭陀船と持渡候書籍銘書』（島津家文書）。
- 39) J. Mac Lean, 1974, p. 62.
- 40) 前掲書, p. 44。5冊本では天保3年及び天保4年に輸入されたウェイランドの語学辞書が該当する。このうち、天保3年輸入の *Beknopt Nederduitsch taalkundig woordenboek*. Dordrecht, 1826. は蕃書調所旧蔵本であり、現在は国立国会図書館に所蔵されている。これには背文字に“*Woordenboek*”とのみあり、ウェイランドの著者の中で「ウォールデンブーグ」といえばこの書を指していた可能性も考えられる。しかし箕作省吾が『坤輿図識』の中でどのような形で使用したかはわからない。
- 41) 前掲書, p. 45。
- 42) 『蘭書目録』 p. 76。
- 43) 前掲書, p. 76。
- 44) 『武雄目録』 p. 121。
- 45) 前掲書, p. 122。
- 46) 『坤輿図識補』の刊行については、呉秀三『箕作阮甫』（大日本図書, 1914年刊）より弘化3(1846)年説がある。これは見返しに「弘化三年丙午鐫」とあることによると思われるが、版を彫んだ事実のみで上梓されたか否かは不明である。また『国書総目録』（岩波書店, 1990年）は刊行年を弘化4年としている。辻田右左男氏は、前掲論文中でこの問題を指摘しているが、序文より『坤輿図識補』が弘化3年に脱稿した事は明白である。従って、出版に際して何らかの事情で遅延したものと思われ、弘化3年から4年にかけて出版されたと考えるのが妥当であろう。
- 47) 『坤輿図識補』（弘化3年鐫、夢霞楼蔵版、国立国会図書館所蔵）「目次」及び「凡例」による。
- 48) 箕作省吾は巻四「本編中所取人物略伝」について、養父阮甫の著作『西史外伝』から引用したことを「附言」に明記している。この『西史外伝』の典拠はニューエンホイスである。
- 49) 『総合目録』 p. 5。
- 50) 『諸書留』嘉永元年、長崎市立博物館所蔵。
- 51) J. Mac Lean, 1974, p. 53。
- 52) 前掲書, p. 53。
- 53) 前掲書, p. 53。
- 54) 前掲書, p. 53。
- 55) 前掲書, p. 53。
- 56) 前掲書, p. 53。
- 57) 前掲書, p. 54。
- 58) 片桐一男「鷹見泉石旧蔵蘭書」（『古河歴史博物館紀要 泉石』1号, 1990.11） p. 35。
- 59) 『総合目録』 p. 34。
- 60) 前掲書, p. 38。
- 61) 前掲書, p. 38。
- 62) 『洋書目録』 p. 22。
- 63) 68)と同じ。 p. 36。
- 64) 『蘭書目録』 p. 78。
- 65) 『総合目録』 p. 5。また「箕作文書」中に阮甫の手になる『八絃勝覧』がある。そこで Isaak Taylor 著, J. Oliwer 蘭訳の *Merkwaardigheden uit elkland van Europa* が使われている。内容面を考慮すれば該当するかもしれない。
- 66) 『蘭書目録』 p. 2。
- 67) 箕作阮甫『八絃通誌』欧邏巴部初編3巻（嘉永4年刊）欧邏巴部二編3巻（安政2年）秋眠天竺楼蔵版（金沢市立図書館若龍館文庫所蔵）を使用。

- (68) 「箕作文書」(国立国会図書館)中に『広輿志』と題する稿本があるが、第一冊の第一葉に「八紘通誌初稿」とある。この第一冊は亜齊亜(Asia)のことが記されている。これは『八紘通誌』において上梓されることなく終わってしまった。阮甫が作成をとどめた原因は不明である。この時期に舶載した『海国図志』の翻刻に力を注いだためであるのか、経済的な理由からであるかは定かではないが、いずれにしてもより多くの海外情報が必要な時期であっただけに疑問が残される。
- (69) 旧幕引継書『市中取締類集』(国立国会図書館所蔵)の「書籍錦絵の部」中「嘉永4亥年8月」に以下のようにある。
- 一、八紘通誌初編三冊 松平越後守殿家来 箕作阮甫著 同人蔵版 浅草茅町 式町目 喜兵衛店  
 一、地学正宗初編四冊 酒井修理太夫殿家来 杉田成卿著 同人蔵版 書物屋 願人 伊八  
 この願書のあとに「書面八紘通誌、地学正宗一覽仕候処、天文方改判相候儀ニ付、兼而御手限ニ而御聞濟相成可然哉と奉存候。……書面八紘通誌外売品売弘願儀、一覽仕候処、天文方改判も相濟候儀ニ付、御何方類役通被仰渡可然哉と奉存候。……」と許可が与えられている。
- (70) *Alphabetische Naamlijst van Boeken, Plaats- en Kaartwerken*, 1833-1849. Amsterdam, 1858, p. 61.
- (71) 前掲書, p. 278.
- (72) 「引用書目」のカナ書きから試みに蘭訳してみれば *Algemeene voorschrift der vijf werelden* となる。
- (73) 「総合目録」p. 47-48.
- (74) J. Mac Lean, 1974, p. 47.
- (75) *Alphabetische Naamlijst van Boeken*, 1790-1832. 's-Gravenhage, 1832, p. 619.
- (76) 前掲書, p. 448.
- (77) (70)に同じ。p. 597.
- (78) 前掲書, p. 261.
- (79) (68)に同じ。p. 36.
- (80) *Gesamtverzeichnis des deutschsprachigen Schrifttums (GV) 1700-1910*. München, 1985, vol. 140 に、スチーラーの「ゴック」版に該当する地図を見出すことができる。すなわち、*Schul-Atlas über alle Theile der Erde und über das Weltgebäude*. 16. Aufl. Gotha, 1836. と *Hand-Atlas über alle Theile der Erde und über das Weltgebäude*. Gotha, 1847. である。それぞれ版を重ねていることから、当時広く流通した地図であったことが窺われる。
- (81) 『八紘通誌』中の「凡例」に「亡児カ坤輿図識及補、其大略記スト雖、脱漏スル所、猶少カラス、今其載ザル所ヲ採ミ……」とあり、『八紘通誌』が『坤輿図識』『坤輿図識補』の補遺として構想されていたことが窺われる。
- (82) (81)に同じ。p. 237-238.

(みやち・やえこ 収集部外国資料課)